

教 仁 庵 草

第237号
(発行日)

2010年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

こわれぬ信心

信仰や信心によって、病気が治ったとか、商売がうまくいくようになったとか、人間関係がよくなった、という話が宗教の話には多い。

しかし、病気は治ってもまた新たな病気になるものであり、信心によつて好調になった商売もこの頃のように景気が悪くなると儲からなくなるのであり、夫婦や親子や友人の関係もいつも良好というわけにはいかないのが世の常であれば、こうした信心は揺らいでくる可能性は当然あるのである。

そして、信心してもうまくいかない、指導者から「それはあなたの信心がたりないからだ。もっと信心を強くしなさい」と言われて一応納得をして続けていくのであろうが、それでもなお大病にかかったり交通事故にあつたりすると「信心なんてあてにならない」という疑念が増してくるのであろう。まして、治りそ

うもない病気にかかる、それまでの信心は崩れ、(神も仏もあるものか)という苦しい状態になってしまいかねない。

先年、それまで経済成長著しい韓国の経済に大きなブレキがかかり、景気が悪化し失業者が増大した時、キリスト教徒の一部の人たちが「もう教会も神も信じない」と言つて騒いだという小さな記事を新聞で読んだことがある。それは教えを説く方もさることながら、経済的な安定や、健康や、良好な人間関係といった、いわゆる世間の幸福を手に入れる手段として信仰を求めていった方にも原因がある。

そういう身体的あるいは家庭的な状況や社会の変動によつて、信仰が動揺し破綻することとは十分にありえることである。いな破綻するのが必然であるとも言える。なぜなら人生最後の死は、私のもてる

ものをすべて奪うからである。

戦後の日本で新興宗教が盛んになり、信心すれば生活が安定するというので信心に入つた人たちが沢山いて、新興宗教の勢いが延びていったが、その信心の功德とやらは戦後の日本の経済発展と伴つていたから、信心すれば生活がよくなるといういわゆる「信仰の証し」が日本の経済成長とうまくヒットしたのだと思う。だから信心の効果を強調することができ、ますます信者を増やし得たともいわれている。

しかし、今や日本の経済状態は横ばいが長く続いて、信心しても商売はうまくいかず、給料は上がらず、信心の効験は現れてこない場合が多い。

そこで、社会が好景気になるのを待つのではなく、自らの政治的力を増大することによつて、現実的な利益を確保しようとして、政治活動に力を入れる教団もある。

しかしこういう信心は、外に効験を求める信心であるから、効験(経済的安定、健康、人間関係の良好など)が現れ

ないとか、逆に不幸や困難がさらに大きくなると、そういう信心は弱まるか破綻していかざるを得なくなるであろう。

真宗の信心は外にその効験を求める信心ではなくて、内に智慧となつてくださる信心である。信心の智慧は、悪や禍いを転じて徳や善として受けとらせてくださる心の眼である。そして、その信心はひとたびいただと、もはや壊れないし、なくならない、

ただし、真宗を熱心に聴聞しているとか真剣に学んでいるというだけで、壊れない信心が身につくとはかぎらない。

真宗の教えを熱心に学んでおり、聴いているということ、真宗の教えに信頼をしているのであるから、一応の信心はあるが、しかしその信心は決して壊れたりなくなつたりしない信心であるとは簡単にはいえない。

真宗の教えを聴いて憶えているだけの信心なら、忘れるとか、あるいは認知症になると消えてなくなる。ちやうど学生時代に英語の単語や歴史

の年表など多くの知識を暗記したが、今はほとんど忘れてしまったように、後から憶えて心ないしは脳髄に保存したものは、はがれてしまい忘れてしまう。

だから真宗の教えを聴いてよく知っているとかよく憶えているだけでは、教義が心の表面に残っているだけであって、真実の信心ではない。

真実の信心とは、仏心が心の深部に届いて離れなくなつた信心である。

宗祖のご和讃に

真心徹到するひとは

金剛心なりければ

三品の懺悔するひとと

ひとしと宗師はのたまえり

とあるが、真心が徹到した人が信心を具足した人である。真心とは仏心であるがそれが徹到する。〈徹到〉について宗祖は「とほりいたる。髓に到り徹る」と注をほどこしておられる。髓にいたりとおる。髓とはいのちの中心部、最深处を表す言葉である。いわば心の深部に至り届くことである。仏心が凡心の底に届いてわれらの信心となりたもうのである。それゆえそのことを仏心凡心一体（仏凡一体）と

もいわれ、凡心である私たちの心と仏心が一体となり離れなくなることを意味する。これはボケても忘れても、なくならない信心である。

ではそのような深い真実信心はなぜ人に可能なのか。

それは、凡夫の力によつては到底そのような真実の信心を実現することは不可能である。如来の大悲心によつてのみ成就するのである。如来の大悲心はまことに不可思議である。仏心の光は無碍光の徳用があるゆえ、煩惱の塊である我らの心に浸透して、ついに我らが心に届き、流れ、我らが心と一つになり、我らの心の主となりたもう。実に不可思議な徳である。

私たちの心がけがよいから、仏心が届くのではない。むしろ私たちは仏心が届くのを邪魔し続けてきたのである。仏心に抵抗し続けてきたのであり、仏心に反抗し続けてきたのであり、仏心から逃げ回ってきたのである。

それをあきれもせず、見捨てもせず、どこどこまでも私たちが追いかけ、照らし続け、喚びかけ、寄り添い続け、はたらき続けてくださる、その

広大な大悲の心がついに届いて我らの心に流れ入りたもうて信心となり、凡心に融合したまい、凡心の主体となりたまもうのである。

それゆえ私たちは仏心大悲のお心をよくよく聞かせていただくかねばならない。それほどこまでに私どもをあわれみ続け念じ続けてくださっている仏心に気がつかないから、あるいは仏のお心の聞きようがたりないから、仏心が徹らないのである。

仏心を〈聴く〉というのも、邪見傲慢の塊である私たちの側のはからいや努力では聴くことはできない。如来に反抗し続け、仏法を聞く能力も資格も徳もない私どもが、如来の光明にもよおされて、如来に受け入れられてお聴かせにあずかる、いわばゆるされて聴くのである。聴聞の〈聴〉の字に宗祖は〈ゆるされてきく〉と注をしておられる。おそれいることである。（了）



拡大する場合は画像をクリックしてください

正信偈に学ぶ問答

(二十五)

本願名号正定業

至心信樂願為因

成等覚証大涅槃

必至滅度願成就

書き下し文（本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり）

*

G 「次に

〈等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり〉

という思し召しについてお話ください。現代語訳では〈仏になるべく定まった等覚の位を成就して、浄土に往生して大いなるさとりを開くことができるのは、阿弥陀仏の必至滅度の願が成就されたことによる〉

となつていますね」

D 「この二句は、本願を信じた人はこの世において阿弥陀仏に摂取され、もはや迷いの世界に退転せず、必ず来世に

大涅槃という広大な覚りを開いて仏に成らしていただけるのである。それは、阿弥陀仏の必至滅度の誓願（必ず滅度に至らしめるといふ誓い）が成就して得られたお力によるのである、との意味です」

G 「では〈等覚を成り〉とは」

D 「等覚というのは、正覚にほぼ等しいということ、正覚という仏の覚りを開く一歩手前の段階のことで、次には必ず正覚を完成する、そういう境位のことを等覚の位といえます。たとえば弥勒菩薩は次に正覚を完成することに定まった菩薩ですから、弥勒菩薩のことを等覚位の菩薩といわれています。〈成り〉ということとは等覚の位に至ることです」

G 「本願を信じる一つで私たちは弥勒菩薩のような尊い菩薩になるのですか」

D 「いいえ、本願を信じても私たちが弥勒菩薩のような徳を完成するということではあ

りません。私たちはどこまでも煩惱熾盛しじょうの凡夫です。ただ阿弥陀仏に撰取された人はたとえ一生涯煩惱は起これども、この世が終われば正覚を成就することが約束され、決定している。そういう次生において仏になることが決定している位においては、信心の人も次ぎの生で正覚を成就する弥勒菩薩と位を同じうするといわれているのです」

G 「われわれ凡夫と弥勒菩薩ではその徳性においては天地の差があるけれども、次ぎに仏に成るべく定まっていますという点では同じなのですね」

D 「ええそうです。極めて卑近なたとえでいえば、泳ぎの達人がいて神戸の沖から四国まで泳いで行き、余裕をもってあと少しで四国の浜に達する」とい状況と、全く泳ぎが出来ないかなづちの人が船に乗せられて、横になっ

ていて、泳ぎの出来不出来とも必ず四国の浜に着くようなもので、泳ぎの出来不出来という点では比較すらできないほどの違いがあっても、向こう岸に着くことが定まっている点では同じです」

G 「そうすると阿弥陀仏の船に乗せられている凡夫は、弥勒菩薩の如く次ぎ（来世）に

大涅槃という仏の覚りを開くことに定まっているのですね」

D 「ええそうです」

G 「では〈大涅槃を証する〉とは」

D 「大涅槃というのは、涅槃はさとりのことですが、大いなるさとりを大涅槃といいますが、それは自らがやすらかな涅槃を証するだけでなく、衆生を涅槃のさとりに至らしめていく徳を成就する、そういう大いなるさとりのことですよ」

G 「他の衆生を涅槃に至らしめる、いわゆる利他の徳を成就するようなさとりゆえに大涅槃というのですね」

D 「ええそうです。こうした大涅槃のさとりを開くことのできる境界が阿弥陀仏の浄土、とお聞きしています。なんのために私たちは浄土に生まれるのか、その究極の目的は、迷いの衆生を涅槃のさとりに至らしめんがためです」

G 「単に私一人が安楽な境界に生まれるということではないのですね」

D 「ええ、浄土が涅槃界であるとは、浄土は、私たちが迷いを転じて覚りを開き、衆生

を助けんがための広大な智慧と慈悲の徳を完成する、そういう領域といわれています」

G 「そうすると、浄土に生まれる目的は自分が浄土で安楽になるばかりではなく、むしろ衆生を救う仏の徳を完成するためなのですね」

D 「ええそうです。そういう大変尊い意義があるのです」

G 「先に亡くなった両親がはたして浄土に生まれているだろうか、それともなお苦しみの境界に流転していませんだろうか、という心配がありませんが、私がこのたび浄土に生まれるなら、なお迷っている人たちを救うて浄土に至らしめるような尊い用きをさせていただきますだけののですね」

D 「ええそうお聞かせただけです。有難いことです。私が浄土に生まれて仏になると、まずは有縁の衆生を救う用きをさせていただくのだといわれています。非常に有難いことです」

G 「南無阿弥陀仏の功德にはそこまでの功德がこもっているのですね」

D 「ええ、私たちの悩みは自分分は浄土に生まれることができて、私に縁のある人たちが

の行く末が心配であり、まだ迷っていないであろうかという心配があります。阿弥陀仏はそういう私たちの苦しみや心配までもすでに知りたもうていて、自分だけでなく他者を救う徳を得させてやりたいとて、五劫永劫の修行をなさって南無阿弥陀仏を成就し、これを私たちに与えて下さるのです」

G 「実際、先だって亡くなった多くの人たちはどこへ行つたのか。私たちはそういうことには口をつむんでいますが、心の中にはこういう問題が、心の中にも残っています」

D 「世の知識人たちは死後の浄土とか、仏になるとかの話を単なる空想や非現実的なおとぎ話のように考える人が多いいですが、自分も含めて人は亡くなってどうなるのか、どこへ行くのか、そういう私たちが本当に聴きたいことについてはいふれません。知識人自身も不透明であり、不安があり、ぼうぼうたる霧に包まれているからです。そういう未知であり、不透明であり、不可解である私どもの行く末に、過去世や現世を含めて未

来世への筋道を仏教は立ててくださっています」

G 「仏教で説かれている未来への道筋に信順するところに現在の私たちの人生に見通しがついて安定し、生まれて死ぬこの世の生にも尊い意味を見出すことができるのですね」

D 「ええそうです。仏教の説く未来を否定することはできません。しかし、それに代わって自他の行く末の問題にまことの光を見出せるような道筋がどこに説かれているのでしょうか」

G 「勝れた知識人でも、その人間的知性では、それはできないと思います。それを仏教は提示しているのですね」

D 「ええ、仏教は、生と死の本質を見極めた仏陀のさとりの智慧から説かれた教法です。その教えに信順するところに、死と死後に意味が与えられ、死と死後に光りを見出しめられてまいります。もちろん、こうした仏教の教説は人に強制すべきものではないでしょう」

G 「信順するかしないかは一人一人の選びにまかされているのですね」

D 「ええそうです」（了）

信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十三

ゴチックの字が松並さんの言葉。

○万善万行のこもった南無阿弥陀仏。頂けば徳もでる。慎みも出る。然し自分の手柄で無い。

（何の人徳のない私に万善万徳のこもれる名号を与えてくださる。名号をいただければ名号にこもれる徳が自然に次第に生活に現れたもうこのこと。人徳のない私には実に有難いことである。ただ、私は己の宿業がしぶとくて厚くて、お念仏の徳がほのかにしか現れないのはもうしわけないことである）

○一声の念仏も、十声の念仏も功德の上からは同じである。かかる広大な御慈悲なるが故に、一代の念仏と流れ出る。南無阿弥陀仏と、如来の御念力が念い出させる。呼び起こす。称えた念仏は一声も無い。持ってゆく念仏でない。御あたえの念仏である。かかる底なき御慈悲を仰ぎ、ひたすらに南無阿弥陀仏と聞くばかり。

（ひと声お念仏が口に出ること、阿弥陀仏の大悲のご念力によって出

てくださるお念仏であり、声である。しかもこのお念仏が一生の間、流れ出てくださるのは底なきお慈悲のあらわれ。私を念じ続けてくださる阿弥陀仏のましますことが、称えられるお念仏において実感させられる。お念仏なくば阿弥陀仏も身近に感じられない）

○聞かねば分からぬ。聞かずともよいとは言わぬが、念仏捨ててまで講釈聞く必要はない。念仏称えるままが、聞いている。

（真宗の教法は称える念仏のいわれ。もとのお念仏を称えずに、念仏の講釈やお説教ばかりを聴いて、実際に念仏を称えないのは本末転倒であり、お念仏を極めて軽んじている証拠。阿弥陀様を悲しませている、とのこと）

○お念仏をいつも、軽く軽く聞いている。然るに南無阿弥陀仏は重いのである。重いのに亦、軽いのである。なぜなればこんな、口に、持てるから、たもてるから。

（お念仏が軽く行えるのは如来のご恩が重いからである。大悲が深いゆえに、私たちは軽くなったもてる、いわゆる行じ易い。しかるに、軽く申さ

れるお念仏の思し召しを軽く聞いてしまう。口先ばかりの念仏に、口に聞こえる念仏に、こもる信心大悲は極めて深く極めて重い。重い大悲を軽く聞いてしまう。浅きは深きなり）

○私に相談なしに、頼みもせんのに私の南無阿弥陀仏に成りたまひ、阿弥陀さんが、称えさせて、阿弥陀さんが念う処へ連れて行く。

（赤子を育てる親は赤子に相談せず育てる。西も東も分からぬ赤子を親が連れて行く。親が全部お膳立てをして、連れていってくださる）

《住職雑感》

*二月二十七日、十数年ぶりにデモ行進に参加した。大阪宗教者合同の《大阪宗教者九条の会》が主催したものである。仏教、キリスト教、金光教、天理教などの宗教者が一〇〇人ほど参加した。大谷派の難波別院を出発して難波の高島屋までの行進で、一時間ほどであった。その間、右翼の若者たちから「お前たちは日本から出て行け」「死んで

しまえ」などの罵詈雑言の大声を浴びながら行進した。政治の世界にベストはなくベターしかない。憲法九条についてはそれを改正するか、しないかで意見の分かれるところであるが、戦後、この憲法の制限があればこそ、日本は海外の紛争に巻き込まれずにこれた面があったと思う。簡単に海外に派兵できるように改められていたら、そうはいかなかったと思う。イラクの今回の自衛隊派遣はごり押しで派遣されたが、それも後方の支援で済んだのは憲法の規制があったからではなからうか。現在、イラクの戦争の正当性が派兵した各国で問題化しているが、憲法の規制を無理に押しつけて出かけた日本の後方支援さえ今ではその正しさが疑問視されている。憲法を今の現実に合わせようとの世論も多いが、それはともすると、より理想的なあるべき状態へと向かうことよりも、その都度の現況優先の論理に流され易い。憲法はやや理想的なものであるべきで、それをどう現実化するかが政治の努力すべき方向であってしかるべきである。

《春季彼岸会法要》

三月二十二日（月）

午後二時始まり

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日（木）

午後二時始まり